

*****ここから『電子耕』*****

隔週刊「78歳が送る農業文化マガジン『電子耕』 第114号

-健康・農業・食・図書・人物情報・高齢者と若者の交流誌-

<http://nazuna.com/tom/>

2003. 7. 24 (木) 発行 西東京市・ひばりが丘 原田 勉

*****発行部数 1702 部*****

<キーワード>

健康・食べ物・農林園芸・図書を中心とした情報を提供し、庶民の歴史も残す。高齢者と若者の交流ミニコミ誌。お互いに情報を交流しましょう。

★重要なお知らせ★113号記事訂正です。

[電耕掲示板]でもお知らせしましたが、113号

<http://macky.nifty.com/cgi-bin/bndisp.cgi?M-ID=1283&FN=20030710072354>

<募集・うどん打ち実演>大久保さんの高齢者と女性にやさしい方法指導

は、十割ソバ打ち実演に変更になりました。ご了承ください。

◆次号予告

次の115号では「遺伝子組み換えを考える」特集としたいと思います。

疑問・質問をお寄せ下さい。季刊『耕』NO.97「拡大する遺伝子組換え作物」

大山勝夫氏の論文を中心に専門家の意見を聞きます。

□ 目 次 □-----

<読者の声>

岡本さん、増山さん、長谷川さん、栗田さん、丹羽さん、小坂さん、ya-san、松山さん、大山さん、斎藤さん、安沢さんから、

<舌耕のネタ>「地下水のチッソ汚染をしない農業・畜産の確立を！」

<山崎記念農業賞>沖縄・宮古農林高等学校環境班の有機肥料開発

<山崎農研情報>農から変える「21世紀」水環境・多面的機能・コンモンズ

<季刊『耕』NO.97>イラク・シリア・キューバ・北朝鮮の農業の概要

<丹羽敏明の戦争体験>14、シンガポール・市内の糞尿処理もやられる

<日本たまご事情>「シンガポールたまご事情・その2」愛鶏園・斎藤富士雄

<森 清の読後感>東野真『緒方貞子ー難民支援の現場から』集英社新書20

03年6月刊、660円+税

<新刊紹介>健康効果が期待される「黒ダイズ」松山善之助・他共著、農文協

刊、定価1650円（地域興しの素材として魅力の豆栽培）

<農文協図書館から>サイト更新情報 農文協ビデオ・DVD販売カタログ

<私の近況報告>7月10～7月22日（文化座友の会副会長辞任）

<読者の声>（メールには出来だけその都度返信していますが、『電子耕』だけで返信・コメントすることがあります。また、長文のメールは本文に組み込みますので御承知下さい。原田から）

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

- 1、件名（見出し）を必ず書くこと。読みたくなる見出しを簡潔・明瞭に。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的にズバリと書き出す。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めの方に書く。
- 3、1回1テーマ、書き出し・本文・結論を10行位にまとめる。
- 4、送信する前に、何を言わんとするか、読み返し、推敲することが大切。
- 5、ホームページを持っている人は、文末にURLをつける。
- 6、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックをする。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。htmlメールもご遠慮ください。

■7/10 岡本さんから：

『電子耕』No113送信ありがとうございました。

■7/10 増山さんから：

> ■6/27 上田さんから：天然農薬除虫菊の復権にご協力ください

<http://www.jochugiku.net/>

ウェブ拝見しました。

早速、サンプル申込み致しました。

除虫菊は以前から注目していましたが
なかなか供給先がなく残念に思っていたところです。

是非、頑張ってください。

環境クラブ 増山

<http://www.ecoclub.co.jp/>

P.S

中学生に環境問題をどう教えるか？

このところ休載していますが、

「郷土学習としての環境教育」

と言うタイトルで環境教育の研究会発足に向けて動き出しました。

■7/11 丹羽さんから：

長谷川さんへ、丹羽から

「桜隊原爆忌の会」にお招きいただき有り難うございました。私の周囲ではもう丸山定夫や園井恵子を知ってる人はおりません。私とてお二人のことを深く知っているわけではありません。例えば丸山定夫が出演した忠臣蔵の大石蔵之助が誰だったか（林長二郎だったかと思うのですが）記憶があいまいです。そのほかにもたくさん映画出演されていた記憶はありますが、思い出せません。また園井恵子も「無法松」以外は記憶がありません。当時私は日活女優の深水藤子の熱烈なファンだったのですが、「無法松」の園井恵子の凜として楚々たる風情を見てからは胸がときめき、深水藤子の影がうすれるほど園井恵子にハマってしまいました。「桜隊原爆忌の会」に伺えば当時の話題に花が咲いて楽しいと思いますが、実は一昨年私は腰痛（脊柱管狭窄症）の手術をして1か月入院、その後1年間通院して医者からは解放されたのですが、後遺症のため目下歩行不如意の状況です。特に駅などの階段の登り下りが不安定なため、折角のお招きに応じられません。御好意を無にしてまことに申し訳なく残念ですが、御了承下さいますようお願い申し上げます。

●原田からのコメント：

いつも、きちんと読んで頂き寄稿もありがとうございました。

昨日、nhkの記者で電子耕の読者が来館し、農業問題の企画情報を話し合いました。

その他、丹羽さんの連載も感激して読んでいるとのことでした。

それで、あの中での短歌などについて聞きたいというので、あなたのメールアドレスを教えました。その内メールがあると思います。

桜隊の会には、私は参加しますから、長谷川さんに伝えます。

では、また。

■7/16 長谷川さんから：

原田様

早速「桜隊原爆忌の会」へお申し込み頂き有難うございます。
お会いできるのを楽しみにしております。

14日に文化座の「若夏に還らず」友人と5人で観てきました。
初めて観た友人は、「私たちの知らない悲しい出来事がいろいろあったのだと
改めて、戦争の恐ろしさを感じた。娘にも見せたかった。」と言っていました。
本当に戦争は人間が人間でいられなくなる。もっとも愚かな行為だと思うので
すが、日本は「有事三法」によって、「戦争をしない国」から「できる国」に
なっていました。
でも諦める訳にはいきません。声を大にして「戦争はいやだ」と言っていかな
ければと思っています。

そのためにも8月6日の「桜隊原爆忌の会」を成功させたいと思います。
あれだけ多くの罪もない人たちがこの上ない惨たらしい殺され方をしたの
から。

上田さんの「安全な農薬除虫菊」の話興味を持って読ませていただきました。
アレルギー体質のわたしは、一般の蚊取り線香に弱く、3年ほど前から「除虫
菊の蚊取り線香」を使っています。

「夢のかけら」

<http://www.h3.dion.ne.jp/~nanchan>

「桜隊」

<http://www.h6.dion.ne.jp/~skr-tai>

■7/11 栗田さんから：

投稿もせずに、すみませんが、一言いわせてください。

このマガジンの構成のことです。
あたまの部分に、主宰者とのメールのやりとりが
延々と続くのはいかがなものでしょうか。
いきなり「読者のへや」が巻頭に出てくるような感じで、
メール発信者は、どこに出ている、必ず見ますから、
この部分は、あとに回したらどうでしょうか。

マガジンとしての、「本文」をまずは最初にのせるほうが
すっきりするのではないのでしょうか。

正直言って、読みにくいのです。

大久保さんの実演講習会、7月30日のあるとか、
成功を祈ります。

わたしも、いまは十割そばのみですが、手打ちうどんの
技も覚えられたら、完璧ですね。

私もあちこちで「十割そば」の手打ち法の宣伝をしていますが、
それぞれの地方・地域で、そば文化圏かうどん文化圏か
ちがいがありますね。
そばにはあまり関心がない地域もあるようです。

いずれにしても、大久保さんのことですから、うどんのほうも、
その手打ち法はユニークなものだろうと思います。
じつは、本日(7月11日)農文協赤坂事務所に
大久保さんがおいでになる予定で、うどんを持参しての
試食会を開催します。(その報告はいずれまた)

●原田からのコメント：

ご意見検討してみます。ミニコミ誌ですから、読者は神様です。
そこが、現代農業と違うと思います。でも研究の余地はありますね。
昨日、nhkの記者が農業問題の企画相談に来館しました。
電子耕・現代農業増刊号の読者です。
あとで、ファクスを送ります。
もっと農業を取り上げる必要があると思いました。ご協力下さい。

=====

■7/14 小坂さんから：

いつも励まされながら読ませていただいています。
私は白神山地で「5反歩百姓」と旅行業を営んでいるものです。小農でささや
かな自給をしてゆきたく、棚田での有機米づくり、わけていただいた自家採取
種の畑とマルメロ畑、牛と共に生きる循環型の暮らしを続けていけたらと感じ

ています。古い民家を皆の協力で1年がかりで再生し、現在そこに住んでいます。

私はひとり暮らしのため、パートで来てくださる地元の方はいるものの、共に新しいしごとをしてくれる方々を見つけることができません（4500人の小さな町です）。

ずっとロコミで働いてくださる方をさがしてきましたが、手がたりずに過労な現状です。もし、白神の森と里の暮らしを再生しながらしごとをするに関心のある方がいらしたら、ボランティアでも求職の方でもかまいませんので、ご連絡いただけないでしょうか。

小舎 hp は以下の通りです

<http://shirakami.hots.jp/>

小坂球実

●原田からのコメント：

メール有り難うございました。ホームページも拝見しました。

まえに、毎日新聞の方に聞いたことがあります。

もう少し私も若ければ、助っ人に伺っただろうに残念。

<読者の声>欄に載せて志ある人の反響を待ちましょう。

■7/17 小坂さんから：追伸

原田様、さっそくのメールをありがとうございます。

母方の祖父母だけが百姓でした。祖父は87歳で他界しましたが、生前、シベリア抑留にも生き抜いたのは、百姓だったからだと言っていました。壊血病で人々が倒れるとき、松葉のお茶を皆に飲ませて救ったそうです。ロシア正教の農民一家が、厳冬にバイカル湖の水で身を浄めている姿に感動した話も聞きました。極限にあってもそうした魂を失わないのは、百姓として山川草木に感謝しながら、すべてのものに神が宿ると信じて生きてきたからなのだと実感しました。

私の住む白神のふもと秋田県藤里町は人口4500人の小さな町です。単独立町を宣言しています。田畑を生かしている方々は皆高齢となっており、私のように、素人でもいのちのめぐりを大切にしたい小農で生きようとする若い年代の人はいません。

私は秋田県南部の西馬音内（にしもない）という町の出身で、日本有機農業研究会の佐藤喜作さんの住む仁賀保は、亡くなった祖父の近くです。

有機農研の方々と同様、祖父母は、自家採取の種を何年も大事に、たえることなくとっていました。

小さな一歩でも（よそから来たため、「気狂い」等の中傷もあります）、生きているかぎり、祖父母とともに大地に立って、まっとうしたいと思います。

これからも電耕を励みに暮らしてゆきますので、どうかご自愛ください。

本当にありがとうございました。

小坂球実

（8/10 発売の「旅」で、再生した民家での農体験が紹介されます。春から農家になったので、体験者を受け入れていますが、「民宿」許可をとっている業者の皆さんがおもしろくないとのことで、保健所に無許可で営業していると通報されました。祖父母のような人間に支えられて生きてきたので、このような中傷はほんとうに残念です）

●原田からのコメント：

私は14歳のとき3反の小作農の養子になり、馬耕農業の経験がありますが、村には、親切な人、意地悪な人、いろいろありました。百姓も人間、今も昔も変わりません。村内のお年寄りを大事に。今のうちに昔のことを聞いておいて<白神山地から>の通信を時々発信してください。

■7/17 ya-san さんから：

貴誌（*112号）

<http://macky.nifty.com/cgi-bin/bndisp.cgi?M-ID=1283&FN=20030626083428>
で紹介されていた山崎農業研究所総会と中国農業問題研究会に参加させていただきました。久しぶりにアカデミックな話を聞き、少しばかり刺激を受けました。

山崎農業賞を受けられた宮古農業高校の活動（化学肥料多投によって汚染された地下水を守るために、土着菌による堆肥作り）には感銘を受けました。

本来地域の高校や大学は、その地域問題の研究啓蒙機関であったはずで、単に個人の営利目的（いい会社に入ったり資格を取ったり）にあるべきではないと思います。社会的に存在意義があったはずです。

宮古農業高校は本来の公益機関の役割と意味を思い出させてくれた点でも実にすばらしいと思いました。

東京の高校などは、地域とはまったく何の関係を持たないところがほとんどだと思います。

ごみ拾いをしているところがあるかもしれませんが、高校生でなくてもできます。

中学や高校での不登校の問題も、自分たちの活動や勉強が地域社会に役立っていたり、かかわりをもっていることが実感できればやりがいも生まれ、やる気を引き出せると思いました。

特に農業高校や工業高校はやれることがたくさんあると思います。

中国の農業ですが、すぐにでも食糧輸入国に転落すると以前から言われており、とても気になっていたのですがむしろ食料は余っており、そのため農家の所得が伸び悩んでいて所得向上を狙っての酪農の推進の様子で、少し安心しました。飼料用の穀物も本格的な生産をしておらず、これからそちらに本腰を入れていけば輸入に頼らずとも何とかいけそうでしたのもうひと安心しました。

日本の二の舞になっては、世界が救われませんから。

有難うございました。

●原田からのコメント：

メール有り難うございました。

山崎農業研究所では、気がつきませんで失礼しました。

今後も、よろしく。季刊「耕」を別に送ります。

=====

■7/18 松山さんから：（新刊紹介欄へ全文掲載しました）

●原田からコメント：黒ダイズの効用は私の友人の「多発性骨髄腫で骨粗症になったのを黒ダイズ汁を一年飲んだら回復した」と聞いていましたので関心がありました。私も試してみます。

=====

■7/19 大山さんからのメールは次号で遺伝子組み換えを取り上げるとき活用

させてもらいます。

■7/19 安沢さんから：

お元気ですか？

少しばかりご無沙汰しておりましたが、やっと高速通信に加入できました。その速度は以前とは比較になりません。

ところで、「電子耕」の誌上も読者の多才な方々の影響か、益々内容のある面白いものになってきましたね。この国の今現在のありようや、主権者である我々に示唆を与えてくれているように感じます。

今また政治の世界では、いろいろと賑やかになってきましたが、あのイラク戦はなんだったのでしょうか。

「大量破壊兵器」は未だに見つかっておらず、果たして その大義名分は？ イギリスでは今それが問われていますね。

世の中の動きはめまぐるしいですね。

そして、そろそろ選挙の動きが出てきました。その時こそが我々の出番ですね。

羊のような国民では困りますし、しっかりせねばと思います。

雨の中、アジサイがきれいです。

どうか ご自愛くださいますよう。

<舌耕のネタ> 「地下水のチッソ汚染をしない農業・畜産の確立を！」

いま、世界的にチッソが過剰になって大きな問題になっています。田淵俊雄教授によると（下記フォーラムの2）人や家畜の糞尿と化学肥料によって単位面積当たりチッソが多くなっているのは第一にヨーロッパ大陸です。第2にアジア大陸。日本も当然大きな値を示しています。

東京、大阪など人口の多いところと茨城、群馬、宮崎などの畜産の盛んな県が続いています。そのほか茶園や野菜畑で肥料を多く使っている埼玉、静岡、沖縄・宮古島などでは大きな問題になっています。まだ外にもあり、国土庁では調べがついているが発表を控えているとも言われています。

これは地下水の硝酸態チッソ濃度の上昇によって飲料水の汚染となり健康障害が起こります。近い将来全国的に大きな社会問題になると思います。

湖沼のチッソやリン濃度が高くなると植物プランクトンが異常増殖して水質汚濁が進みます。主な汚濁湖沼は、手賀沼、印旛沼、児島湖、霞ヶ浦、諏訪湖などです。琵琶湖のように飲用になる湖も問題になっています。

農業用水がチッソ過多になると水稻が倒れる被害も出てきます。

このようなチッソ汚染の害を防ぐためには、施肥量の多い茶園や野菜畑、果樹園、水田の肥料を徹底して減らす農法に転換する必要があります。

また、多頭飼育の養豚場は頭数制限をするか、糞尿の素堀貯留を止め、堆肥にして土地に還元する処理方法を確立することです。自治体は外の企業のように畜産糞尿を産業廃棄物として取り締まる措置をするべきだと思います。

詳しくは、次の図書を参考にお読み下さい。

書籍『21世紀水危機』「農法の近代化にともなう窒素汚染と対策」田淵俊雄論文。申し込みは、03-3357-5916<山崎農業研究所・小泉>定価3900円送料別。書店では農文協発売です。

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai008.html>

<山崎記念農業賞>沖縄・宮古農林高等学校環境班の有機肥料開発

生活に必要な水の全部を地下水に頼っている島で、地下水のチッソ濃度が上がり島民の死活問題になっていた。そんな中、高校生たちが立ち上がった。

「宮古島の水を守り、土づくりを通して宮古島の農業を発展させよう」の合い言葉で、化学肥料を2分の1に減らし、サトウキビの生育を促進させ糖度を上昇させる成果をあげた。

1996年から始めた同校のクラブ「環境班」が開発した有機肥料「バイオ・リン」によって土に蓄積された磷酸カルシウムを分離活用することができた。それも生徒たちが自主的に研究して発見した土着菌によって開発したのだった。

それから今でも同校のクラブ活動は後輩に引き継がれ、生徒たちは休日も登校して研究を続け、今年3月に行われた世界水フォーラムで発表、高い評価を得た。(詳しくは次の講演要旨1、をお読み下さい)

山崎農業研究所(所長・熊沢喜久雄)では、若い力で明日の農業・農村を切

り開く皆さんの「郷土を愛する心」と「あらがま精神」のさらなる発展を祈念して、第28回山崎記念農業賞を贈呈した。

<山崎農研情報>農から変える「21世紀」水環境・多面的機能・コンモンズ
7月5日第29回総会で次のようなフォーラムが開かれた。(講演要旨)

1, 農業生産と地下水汚染 前里和洋 宮古農林高校教諭

宮古島は農業、都市用水の100%を地下水に依存している。平坦な島で山がないので川がない。大規模な畑地造成で森林も少ない。すべての水資源は地下水に頼っている。ところが、この地下水の硝酸性窒素濃度が1960年代から上昇し始め、現在は6〜9ppmになり、危機的な状況にある。1997年から高校の環境教育として、プロジェクトクラブ「環境班」の生徒は地下水保全に取り組み、その汚濁の原因を突き止めた。サンゴ石灰岩から生成した土壌は与えた肥料からリン酸成分を多量に奪う。このために、これを補うのに農業生産者は肥料を多量に使う。地下水汚濁の原因が土壌へのリン吸着であることを明らかにした。

この土壌に固定されているリンを作物が使えるようにすれば、施肥量は少なくてすむ。島の土壌を調べた結果、作物にこのリンをできるようにする土壌微生物が存在することを発見した。そこで、サトウキビの絞り滓や木材チップ廃材を発酵させ、その微生物を含む有機肥料をつくり、これを用いて全体の施肥量を少なくすれば、地下水環境を向上できることを実証した。県農業試験場でも成果の追試を予定しているが、循環型農業を行うという意味からもこの研究に高い評価が与えられている。

(1964年生まれ。東京農業大学卒。琉球大学修士課程修了。沖縄県立宮古農林高等学校教諭)

2, 農法転換による水環境の改善 田淵俊雄 元東京大学教授

農法の近代化で農地への多肥、家畜の多頭飼育などで地下水や河川、農業用水の水質汚濁が進んでいる。とくに湖沼、内湾は富栄養化と言うより、過栄養化と言った方がよい。硝酸塩の汚染は健康障害をもたらす。硝酸性窒素濃度の基準値10mg/L(10ppm)以下に営農からの排水を押さえねばならない。窒素は野菜畑200〜400kg/ha,茶畑では500kg/ha以上となっている。畑からの流出する

作物に利用されない成分を 30%、浸透水量 1000mm とすれば、その流出量（溶脱量）は、排水の基準限界値 10ppm をはるかに越える計算になる。これが、地下水を汚濁する大きな原因である。畑地からの排出濃度 10ppm を 1ppm に保とうとすれば、そのための希釈水として、10 倍の森林面積が必要となる。水田でも代かき後の排水は多量の窒素を流出するので問題。現在の農業生産性や、農産物の品質向上のための技術を水環境保全の立場から見ると、以上のような環境に大きな影響を与えていることになる。このような環境の情報が生産者側にどの程度伝わっているのかが疑問である。今後、土地利用の方法を含めた環境に優しい技術体系への改善と生産者への積極的な環境情報提供、および水質環境を守るための社会的補償制度の検討が求められる。

（1935 年生まれ。専門：地水学、農地工学。茨城大学、東京大学教授、日本学術会議会員を歴任。水質の研究で日本農学会賞、読売農業賞などを受賞。著書：集水域からの窒素・リンの流出」東大出版会ほか）

3、多面的機能と農業用水-地域共通資産としての用水の可能性

坪井伸広 筑波大学教授

農業用水の多面的機能を十分に発揮させるには農業者でない地域住民の支持が不可欠である。農業用水の灌漑機能と多面的機能をともに発揮させる「地域共通資産としての用水」の可能性について論じた。

過去 30 年間に水稻の作付け面積は 140.8 万 ha 減少した。しかし農業用水の年間使用量はこの 25 年に 16 億 m³ 増加した。これは水稻面積 (ha) 当たりの年間水使用量に換算すれば約 8 割 (1.8 倍) もの増大となる。しかし、今後の水稻によるコメの国内生産は増加は考えられないので、農業用水需要は今後減ると予測される。農業部門でも他の産業で果たしてきた水利用の効率化を進める必要がある。同時に農業用水の多面的機能との両立性を求めるには、過去 30 年間に使用量を増やしてきた農業用水の内容を検討して、その効率化のための制度的再編が必要であろう。

そこに用水行政の転換が求められる。農業用水の効率化には国内稲作の維持（農業者）と農業用水の多面的機能を支える（地域の人びと）との協力が重要であり、これらを解決した上で農業用水を地域共通の資産として位置づけることができる。

（1948 年生まれ。専門：農業経済、農業水利論。著書：「水資源の涸渇と配分」農文協。「水利の風土性と近代化」東大出版会ほか。）

4, 21世紀型水資源マネジメントの構想-コモンズ論の立場から

千賀祐太郎 東京農工大教授

水不足は環境・食料・衛生の危機でもある。このような世界的規模の水問題の中で、水問題に市場メカニズムを導入するという考え方がある。これは問題の本質的な解決策につながるであろうか。

水は自然の構成要素であり、基本的人権に関わる必需財であるので、地域・河川によって確率的な変動性をもつ循環資源としての特徴を意識した水管理が望まれる。20世紀に巨大化した生産力に適応させる目的のために、伝統的水社会に学ぶことなく、また変動資源としての不確実性への認識なく、安易に「市場」に適用することは取り返しのつかない「失敗」を招く。人間の生産力への過信と水の占有・所有を誤信したカルホルニアの水資源開発がその良い例である。

わが国のような伝統的水社会においては、現代的「コモンズ」*として水資源の管理体制の確立が必要である。それには従来の水資源の地域共有性の技術的、社会的特徴を歴史の中から学び、そして「公平性」「効率性」「持続性」を満たす新しい法制度（水利権、水利組織、水環境保全、価格政策、民間企業との関係）の確立と現代技術の正しい適応、ならびに住民参加・協力が求められる。

(*所有者が特定個人でなく共同体や社会全体に属する資源)

(1948年生まれ。専門：農業水利学、水資源計画学、農村計画学。著書「水資源のソフトサイエンス」鹿島出版、「よみがえれ水辺・里山・田園」岩波ブックレット、ほか。日本ランドワーク協会理事)

(文責および注 安富六郎)

<季刊『耕』NO.97>イラク・シリア・キューバ・北朝鮮の農業の概要

イスラム社会の農業については、日本であまり知られていない。例えばインターネットでシリア農業を検索しても青年海外協力隊の募集情報しかない。イラクについて農水省の統計情報だけで、その実態はわからない。

季刊『耕』はイスラム農業の概要をイラクとシリアの例で紹介。併せてソ連の援助で成り立っていた社会主義的農業をキューバと北朝鮮の実態を紹介して

いる貴重な文献である。概要を紹介しよう。

「イラク戦争と食料・農業の危機を考える」(原田 勉) 巻頭言

イラク農業は灌漑農業と歴史的变化をたずね、石油が食料輸入を促進させ、今度のイラク戦争の被害が食料危機をもたらしたという。

「シリアの農業概況」(太陽コンサルタンツ顧問・土屋晴男)

地中海沿岸の多雨地は小麦、豆、野菜、果樹、砂糖大根、綿が作られ、有名なオリーブ、柑橘は輸出もしている。というように農業生産適地ゾーン区分図とゾーン別の特徴をはじめ地理的概況と自然条件、政治社会経済情勢を述べている。(以下7ページにわたって詳述)。

農業の現況では土地利用、灌漑、作物生産、畜産、行政組織、試験研究・普及・金融・農協まで紹介している。農業政策の現状と方向では、計画経済から市場経済へ、商品作物の生産拡大、農産物の市場問題までに至っている。

しかし国土の半分以上が砂漠地帯で灌漑は農業生産の決め手である。

「北朝鮮の食料に思う」(東大名誉教授・熊沢喜久雄)

旧ソ連の崩壊によって化学肥料や農薬、燃料の供給が絶たれてから、極端に農業生産が落ち込んだ。自然災害も続いたがこれに対処する政策がとられていない。休耕田は放置され廃田が多くなった。食料生産・窒素肥料の消費など日本、中国、韓国と北朝鮮の比較数字は説得がある。これに比べ、同じソ連型社会主義農業で援助がなくなった国キューバはどうか。

「キューバ農業の現状と技術協力の課題」(東大名誉教授・山崎耕宇)

砂糖産業の歴史からキューバ革命をへて、社会主義圏の解体によって最悪の経済危機に陥った。そこから脱出する農業の現状を紹介。食料危機を克服するために1日1人当たりの消費量を3分の2に減らし窮乏でも一人の餓死者もださなかった。今後の農業は砂糖産業の半減。稲作、大豆、トウモロコシ、野菜などへの転換が計られた。とくに注目すべきは市民による空き地利用の作物栽培、都市ゴミの堆肥化、有機農法を国全体で取り組み成功しつつあることである。北朝鮮はキューバをぜひ見習って欲しいと思う。

季刊『耕』の申し込み先(定価1000円)

160-0004 東京都新宿区四谷3-5 太陽コンサルタンツ内 小泉浩郎
電話03-3357-5916 FAX03-3357-3660

E-mail

<丹羽敏明の戦争体験> 14、シンガポール・市内の糞尿処理もやられる
7/11

埠頭の作業には米や砂糖の積み下ろしなどがあつた。船積みされている米や砂糖を担いで下ろすには、埠頭と船に懸けた板の橋を渡ってくる。30度ぐらいの傾斜がある上に60kg以上の重量のある荷物を持って渡るのでその揺れ方は尋常ではない。華僑の苦力はその橋を荷物を担いで体で調子を取りながら難なく下りてくる。そんな軽業みたいな芸当は、荷物を担いだけでふらつく日本兵には到底無理だ。監督の英兵もその点は理解してくれて、わが方は下ろした荷物をトラックに積載する仕事を担当することになった。米も砂糖も麻袋に入っている。日本の米俵よりかなり重く感じた。特に砂糖（中身はザラメみたいだった）は暑さのために溶けだして肩に食い入るような重さだ。上衣は脱いでいるから汗と砂糖のベトベトが体にこびり付く。トラックまで約10m、1回行っただけでヘトヘトになる。日差しは相変わらず強烈だ。目がかすんで頭がクラクラする。埠頭には日陰がない。休憩時間がくるまで休むことは許されない。せめて歩くのをゆっくりしながら少しでも体をいたわる程度のさぼり方しか出来ない。

埠頭の作業にはさらに過酷なものが待っていた。それはセメント運びだ。船から下ろしたセメント袋を担ぐと、セメントの粉が肩に付く。汗とセメントが混じり固くなって肩にこびり着く。その上にセメントを担いで歩くとずれて肩の皮がむけてヒリヒリする。作業が終わる頃には顔も体全体もセメントで真っ白。肺の中までセメントが入り込んでくるようで呼吸が苦しい。そのままキャンプに帰って水道の蛇口から水を出しっぱなしにして体を洗い、うがいをする。そしてテントの中に毛布を敷いてぶっ倒れたきり、食事をするのも億劫なほど疲れがひどかった。

ある日、市内の家庭の糞尿処理をする労働組合がストライキを起こし、各家庭の糞尿が溢れだし、作業隊に清掃の要請がきた。華僑の家のトイレは鉄製の容器に排泄し、それが満杯になると清掃人が空の容器と交換する。汚物はトラックに積み込まれ浄化工場に運ばれるニシステムになっている。その容器交換の清掃人組合がストライキを起こしてサボったので市民の困惑は極限に達したとい

うわけである。容器そのものはそれほど大きくはないが、汚物が一杯入るとかなりの重量になる。臭いも強烈だ。容器の汚物をこぼさないように運ぶのも一苦勞。この作業には日頃われわれに悪感情を持っている華僑の奥さん連中も感謝してくれ、タバコや菓子類を差し入れてくれた。皇軍のプライドも地に落ちたものだとかやさしかったが、逆に「どんな仕事でもやってやろうじゃないか」と
開き直す気持ちにもなった。それにしても情けなかった！

<日本たまご事情> 「シンガポールたまご事情・その2」 愛鶏園・斎藤富士雄

タマゴ大追跡

今年の梅雨は長引いている、作物には悪いがニワトリたちには涼しくて快適だ。産卵が順調のためか、卵価は大暴落である、こちらのほうはニワトリ屋さんにとって快適ではない。

すこし手前味噌になりますが@niftyのDigital portalに「タマゴ大追跡」なるお笑いレポートがあります。

その材料に私ども愛鶏園が使われています。

養鶏にまったく関係のない若い人が軽いノリで養鶏場を紹介するとうこうなるという見本です。

ヒマのある人は覗いて下さい、写真が30数枚で読み易いです。

<http://portal.nifty.com/special03/07/17/>

(以下6ページまで)

シンガポールの養鶏家 Koh さんの話を続けます。

当地駐在の日本人は現地の卵を衛生上の問題で怖がって生で食べません、私ども愛鶏園が現地の日系デパートに生食用の卵を輸出していたことも Koh さんは知っていました。

シンガポール国内の養鶏が隣のマレーシアなどから来る安値の卵に対抗するには、徹底した差別化しかないと言うのが Koh さんの結論でした。

既に述べましたように、周辺諸国に比べてダントツに所得水準の高いシンガポールの消費者の関心は、卵について値段の安さもさることながら、その鮮度、

安全性、生産履歴、、、等に移ってきていると Koh さんは言います。

ちなみに ALIC の海外駐在員小林さんの調査によれば、シンガポールの鶏卵価格は日本からの空輸によるものが 1 個 1 シンガポールドル (72 円)、国内で生食用に生産したものが同 75 セント (54 円) と日本人をターゲットにしたものはきわめて高い価格で販売されています、通常のもは同 12~30 セント (8.6~21.6 円)、マレーシア産のものにはさらに安値であるようです。

生産履歴がわかり、鮮度が良く、安心なシンガポール国産の卵を増やすチャンスだと、Koh さん親子は意気軒昂でした。

このことは、とりもなおさず日本の鶏卵業界が直面するであろう中国卵の安値攻勢に対抗する方策そのものと確信しました。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

●原田からのコメント:「タマゴ大追跡」で「元気鶏のすこやかたまご」の生産から配送まで拝見しました。新座集荷所とは?、私の隣町ですね。驚きました。

<森 清の読後感>東野真『緒方貞子—難民支援の現場から』集英社新書 2003年6月刊、660円+税

7/21

東野真『緒方貞子—難民支援の現場から』集英社新書、2003年6月、660円+税

http://books.shueisha.co.jp/CGI/search/syousai_put.cgi?isbn_cd=4-08-720199-6&mode=1&jya_flg=3

[緒方貞子が提起する「共生の構造」]

緒方貞子さんが難民高等弁務官を辞してから早くも2年半が過ぎた。状況は、いよいよ緒方さんを必要としている。特に日本が軍事大国への道を歩むのか、戦後培ってきた民主国家の道を守るのかについて、緒方さんの発言は重要である。

現在、日本はアメリカに追随して軍事大国を目指す姿勢を強めている。そのことについて緒方さんは、異を唱える。「日本は軍事的な大国になって動く

いうことはやめたんだし、やめたということで非常に立派な国になってきたんですよ」(P189)。これからは外交が問われる時代で、その外交は多元的でなければならないと主張する。

この発言は、著者がバグダッド陥落の03年4月22日にニューヨークにいる緒方さんに電話取材して得た証言の中にあったという。著者はNHKのディレクターで、緒方さんの退任直前から数回にわたり直接取材してドキュメント番組を作った。その信頼関係から得られた発言だけに注目したい。

本書は、NHKの01年1月の緒方氏退任を機に放映された番組と、9・11の同時多発テロ後に取材放映された2本の番組に合わせて、その後の緒方氏の活躍を取材して綴られている。緒方氏の『私の仕事』(草思社、02年12月。「電子耕」99号。私の個人HPに紹介)を補うによく、現在時点での日本への必要な提言になっている。しかも、緒方さんが「本書に寄せて」で書いているように、この本は弁務官在任中に下した決断と作った状況について、緒方氏ならびに関係者に取材して「他では得ることのできない証言を引き出して記録した」ことに特徴がある。今後、緒方さん自身の『回顧録』が出た後でも、本書で確認する必要があるほど価値ある本だと評せよう。本書を通読後、緒方氏と関係者の発言を読み直してその感を強くした。

高等弁務官時代に緒方さんは、難民に寄り添うことが何よりも重要だと主張している。難民を「守るためには、そばにいないといけない。彼らとのコミュニケーション、彼らの安心感、信頼感、それを得るためには、現場に人がいなければいけないわけです。」(P35)。「被害者が国境を越えようと越えまいと、彼らのそばにいて保護を行うべきだ、という緒方さんの決断は重要でした。」(官房長の発言。P46)。「緒方さんは『危険にさらされている人々の隣にすることが最も重要である』と信じていたのだと思います。」(官房長。P104)。

この「そばにいる」という姿勢と行動は、人の生活と教育には欠かせない基準である。現在の教育問題の根幹にはこの原則が重んじられる必要がある。

しかし、そばにいればそれで済むというわけではない。そばにいた上で人々に行動することを促し、生活を創りあげるようにアピールして支援する。緒方さんはそのモデルを「ボスニア女性イニシアチブ」という事業で示した。東野氏の報告によると、女性たちが立ち上げる小規模ビジネスを支援するこの事業は、96年10月に始まって99年末までに500近いプロジェクトが支援されたという。この事業の中で、「内戦で傷ついた三民族が、憎しみを超えて始めた新し

い事業」もあるという（東野。P117）。

「job sharing（仕事の分かち合い）ということを経験しきりと言い出して、それが job for coexistence（仕事を通じた共生）になって、今度は imagine coexistence（共生の創造）という形で、考え方が進んでいます」（緒方。P119）。

これは緒方氏が提言してUNHCRが立ち上げた実験ということだ。その成果はゆっくりだが出つつあるようだ（緒方。P167）。紛争後の社会再構築には、そのような「仕事」を中心にした共生の努力と行動が人々の心を融和させるに違いない。隣人は、職場においても、学校においても、地域においても気持ちを通わせなければならない対象である。それには、互いに生きていくための努力である仕事や勉強で力を貸し借りするのが一番分かり易い方法だ。

人は、「どうやって自分で自分を守り、自分で運命を切り開いて行くか」（緒方。P163）と厳しく問うてもいる。そのために、そのような力を人々につけること、強める努力が本来の「援助」であると考えている。そのことを、緒方氏が共同議長になっている「人間の安全保障委員会」の最終報告書で強調しているという。その概要が第8章に紹介されている。参考にしたい。

緒方氏は、高等弁務官時代、前任の方々に比して現場を歩くことで最右翼であったという。「共にいる」、それでそこにいる人々の気持ちがわかり、それ故にその状況に対しての判断に狂いが少なくなり、しがらみの多くを絶って決断を下せる。

学者である緒方さんは、そのメリットを学者は「自由にものを考えられる」（P130）からと退任直前に表現している。そのメリットを生かせない学者も多くいるだけに、貴重な分析である。

「共生の構造」を実践からつむぎだし、学問的に構築した緒方氏のしなやかさに感銘を受けた。

鶴見和子（1918年生）、犬養道子（1921年生）、それに1927年生まれの緒方貞子、同年の一番ヶ瀬康子（私の勤務先で客員教授をお願いしている）、一年遅れの暉峻淑子とあげてみると、この人々こそ生活の中で辛苦の人生を考え抜いて生きてきた女性であることに気付く。いま「戦時下」としてこの人々に学ぶことが多い。戦時下に女性は、真実を知り、生活をしっかり守って生きるものだ。

<新刊紹介>健康効果が期待される「黒ダイズ」松山善之助・他共著、農文協

刊、定価1650円（地域興しの素材として魅力の豆栽培）

私は長年研究公務員として農業研究、普及指導にたずさわりました。米の乾燥、大豆の乾燥に少し貢献しましたが、定年前の最後の10年間、特産黒ダイズ「丹波黒」の機能性研究に従事し、心ある医師との共同研究で黒ダイズ丹波黒の機能性を臨床効果で明らかにできました。

このたび、農文協編集部のおすすめで下記の書籍を発刊させて頂きました。別便にてお送り致しますので、ご一読の上、電子耕でご紹介下されれば光栄です。機能性の部分は農家の方々以外に40代以上の方々に広く役立つと思います。

書籍名 新特産シリーズ 黒ダイズ

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=03035519>

著者 松山 善之助（元兵庫県専門技術員、近畿農政局大豆需要拡大調査委員座長）

山下 道弘（京都府農林水産部農産課参事 前京都府専門技術員）

佐藤 久泰（元北海道専門技術員 技術士 ホクレン研究員）

矢ヶ崎 和弘（長野県中信農業試験場畑作育成部主任研究員）

医学監修

野崎 豊（医学博士 ノザキクリニック院長）

出版 農文協平成15年7月5日刊 191ページ 本体1571円

内容 漢方で評価の高い黒ダイズについて機能性と品種選びか

ら加工販売までを現場指導、現場研究の実務に従事した人が解りやすく解説した。農家の栽培マニュアルにとどめず、消費者の方々が参考となる機能性情報と商品選択、加工の情報が得られる内容となっている。

とくに漢方の薬種としての黒豆を臨床で用いた成果の紹介は医学情報誌、兵庫県刊行以外ではじめてである。

松山善之助

Zen 健康研究所

〒509-0401

岐阜県加茂郡七宗町上麻生5017

1939年岐阜県生まれ。岐阜大学農学部総合農学科卒業。兵庫県立中央農業技術

センター経営実験室長を経て、現在、近畿農政局国産大豆需要拡大調査委員。

<農文協図書館から>サイト更新情報 農文協ビデオ・DVD販売カタログ

2003.7.14 更新情報

◆新規収蔵図書

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/01new.html>

◆ニュース

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/sp/200307/news1.html>

農文協ビデオ・DVD販売カタログができました。(WEBで試し視聴可能)

当館では、ビデオソフト館内鑑賞のご案内にあるとおり館内でビデオ鑑賞ができますが、このたび農文協のサイトにビデオ・DVD販売品カタログができ、CATVやADSLなどのブロードバンド接続されている方々には、一部作品が試し視聴できるようになりました。是非、下記リンクからお試してください。

(原田勉の作品、「農耕の歴史」も視聴できます。)

※農文協ビデオ・DVD販売カタログ

(ブロードバンド環境なら試し視聴もできます。)

<http://www.ruralnet.or.jp/video/index.html>

自然と人間を結ぶ シリーズ『農村文化運動』の紹介ページができました。

<http://www.ruralnet.or.jp/nbu/index.html>

◆話題の図書『写真で綴る 昭和30年代 農山村の暮らし

高度成長以前の日本の原風景』

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai010.html>

信州富士見町の百姓・武藤盈が、彼の故郷と農閑期に鋸行商に歩いた秩父の人々のありのままの暮らしを写した370点の記録写真。民俗学写真家の須藤功が、その知恵や思いを聞き書きし、わかりやすく解説。

◆近藤康男文庫目録その7／8／9

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/071kondoubunko1.html>

<私の近況報告> 7月10～7月22日（文化座友の会副会長辞任）

7月11日、NHKのK記者の訪問を受ける。教育テレビ以来の『電子耕』の読者で農文協の雑誌や本も利用しているが、農業問題を取り上げたいので話を聞きたいという。食・農・水の安全性など多岐にわたる話し合いだったが、典型的な問題として地下水汚染のことを話した。ちょうど山崎農業研究所の表彰もあった宮古農林高校の例を中心に今回の特集の内容を紹介した。

12日、農工大日中友好会の中国問題研究会に参加、中国酪農の二つの事例の報告を聞いた。中国では、生の牛乳は普及していない。日本の30年まえの酪農のように発展途上にある。天津市と河北省鹿泉市の現状を岩瀬慎司獣医が報告し、東北部黒龍江省の事例を周曉明教授が報告した。飼料や飼育技術に多くの課題をかかえながら、乳牛の飼育頭数が急激に増大しているという。農文協では岩瀬さんらと共に3年前から中国酪農の技術支援をしてきているが、将来有望だけに日本各地からの技術・経営支援が待たれている。

17日、劇団文化座の「若夏に還らず」森口・最後の学徒兵よりを観劇する。その後、文化座友の会理事会に出席、新理事を選出この秋に新体制で刷新することになった。この機会に原田は体調優れず視力低下とあわせて夜間外出を止められているので、友の会副会長の職を辞任することが承認された。

23日、『食べもの通信』9月号に近藤康男先生の紙上インタビューの記事構成に協力し、先生の写真提供をする。

次回 115号の締め切りは8月5日、発行は7日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願い致します。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：本体700円＋税 発行日：2002年10月4日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/10.html>

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「78歳が送る農業文化マガジン『電子耕』」 第114号

バックナンバー・購読申し込み/解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

2003.7.24（木）発行 西東京市・ひばりが丘 原田 勉

<mailto:tom@nazuna.com>

発行部数 1702 部 **ここまで『電子耕』*****